

【論考】

ジル・ドゥルーズの「女性」論に関するメモ

内藤 慧

0. はじめに

ドゥルーズの没後 20 周年に当たる 2015 年に、書簡や講義、1953 年の処女作『経験論と主体性』以前に書かれたいくつかのテキストなどを収めた Gilles Deleuze, *Lettres et autres textes*, édition préparée par David Lapoujade, Minuit, 2015 がフランスで公刊された。日本では堀千晶、宇野邦一によって早くも翌年 2016 年に邦訳され、『ドゥルーズ 書簡とその他のテキスト』(以下『書簡』と略す)として河出書房新社から出版される。こうして 2017 年現在、講義「基礎付けるとは何か」や DG-Lab でも読書会の中でその一部を扱った 1980 年代のライブニッツ講義などの講義録を別にすれば、ドゥルーズによって残されたテキストや議論のほとんど全てがある程度明解な日本語で読まれることができるようになった。本論ではこの『書簡』に収められたドゥルーズの最初期の論考のひとつである、「女性の叙述」を大まかに紹介するとともに、彼の論ずる「女性」像とはどのようなものか考えてみたい。

ところでドゥルーズ哲学において「女性」概念を問うことには、どのような意味があるのだろうか。本論に入る前に少し確認しておきたい。ドゥルーズにおける「女性」概念は例えば以下のような文脈において持ち出されているように思われる。①『ミル・プラトー』における生成変化論などに見られる「女性になること」という表現、②反父権論としてのマソヒズム論において父性から離れた「新たな男性」への再生の契機となる拷問者＝女性、③『意味の論理学』において、私・世界・神という三項が失われる物体的深層を経て、それら一切を否定するのでなく宙吊りにする非物体的な境界＝表面へと浮上する「少女」＝アリスというイメージ。などなど。本論は、以上のような文脈においてしばしば登場する「女性」概念ないし「女性」的表象の価値を問うための足掛かりを、最初期のドゥルーズが既に構想していた「女性」についての哲学的議論を参照することを通して得ようとするものである。そのため上記の文脈における議論に詳細に踏み込むことはせず、「女性の叙述」における「女性」概念の抽出のみを目指すことになる。

(本稿は、以上のような構想に基づくメモであり、内容面にお

いても形式面においても、論文としては大変多くの不備を抱えている点をあらかじめご了承ください。)

1. 「女性の叙述」の哲学的背景

「女性」にはまだ哲学的規定がない。これは喫緊の課題だ。」という冒頭の文言からもわかるように、この論考によってドゥルーズは「女性」という概念を規定することを目指している。さらにそれが哲学的規定と言われているからには、それは生物学的な性別としての「女性」や、ジェンダーの観点からみた「女性」といった「女性」像とは異なるものが求められていると考えられる⁽¹⁾。では、「女性」に関する哲学的な背景とはどのようなもののだろうか。

他者の哲学は奇妙なもの、気味の悪いものである。その理由は単純だ。この哲学が私たちに提示する世界は、性を持たない世界なのだ。コミュニケーション、共感、こうしたものの良心的な混合は、実に純粋な魂たちの活動なのだ。⁽²⁾

まずドゥルーズはここで、ある種の他者論が無性的なものであることを批判している。そして続く箇所ですルトルが欲望や愛といったテーマを論じたことを評価する。しかし以下の点についてサルトルは即座に批判される。

しかし進歩したと見えたのは外観だけだった。性をもつのは、性交するもの、愛するものであって、愛されるものではない。愛されるもの自身が性を持つのは、この存在が愛するものになるときに過ぎない。ここには意識の相互性の古典的な錯覚が繰り返されているだけだ。⁽³⁾

ドゥルーズはここで、性愛の局面を愛するものの側、主体の側からのみ考えている点について、サルトルを批判している。つまり、サルトルにおける愛されるもの＝他者とは、愛するもの＝主体によって愛されているもの、なのである。そして、ドゥルーズはこのような考え方とは真逆のテーゼを提示する。

大原則として、事物は意味を持つために私を必要としなかった。(4)

つまりドゥルーズの立場としては、性愛の局面において愛されるものは、愛するものとは無関係に、愛され得るものとして表れているということになる。以上から大雑把にドゥルーズが考えている「女性」概念の哲学的背景をまとめることができる。①ドゥルーズは「女性」概念を考える上で、性愛という局面における他者論をベースとしている。②この他者＝愛されるものについての議論において、他者は主体との間で考えられるのではなく、他者は主体とは独立している。それでは、このような背景のもと、ドゥルーズは「女性」をいかなる概念として規定することになるのか。

2. 「他者」と「女性」

確認したように、ドゥルーズは「女性」概念の規定という試みを他者論の文脈において遂行しようとしている。しかし一方では、ドゥルーズは「女性」概念を「他者」の概念と明確に区別している。ドゥルーズの他者論は例えば、「無人島の原因と理由」(『無人島 1953-1968』所収)や「ミシェル・トゥルニエと他者なき世界」(『意味の論理学』所収)などで論じられているが、「女性の叙述」における議論がそれらとどの程度通ずるかは別稿に委ねる。ドゥルーズによれば、他者とは「この疲労させる世界のなかにあるが、にもかかわらず、その態度によって・・・疲労させるものなど存在しない世界を表現することができる」ものである。これは「可能世界の表現」、「不在の外部世界の表現」と呼ばれている。一言で言ってしまうと、この世界において、この世界とは別の世界を示すものが他者である。そして、ドゥルーズはこのような他者が、一方ではわれわれの敵でもあり得るとするが、他方でわれわれがこれと友情を結ぶことの可能性をも提示している。つまり、われわれは他者が示す可能世界をこの世界の側から単なる不条理として片づけてしまうこともできるし、一方でその世界を受け入れることもあり得る(5)。このような存在をドゥルーズは「他者」として規定している。

では「女性」はどうだろうか。

彼女においてすべては現前性である。女性は可能世界を表現したりはしない。あるいはむしろ女性が表現する可能的なものとは、外部世界ではなく、彼女自身なのだ。(6)

他者が「可能世界の表現」であったのに対して、女性が表現するのは「彼女自身」である。このことは何を意味するのか。他者

はこの世界にあって別の世界の可能性をわれわれに垣間見させるものであった。これに対してわれわれはそれと連帯することもできたが、敵対することもできた。他者は外部の可能世界をこの世界において表現しているのだから、われわれは他者が表現している外部世界の存在を否定し、他者の表現行為をこの世界における単なる不条理な「ふるまいに還元する」ことができるのだ。つまり表現を行う他者と、それが表現している外部世界とは切り離され得る。それに対して、女性はそもそも外部世界を表現するのではなく、彼女自身が可能的なものとして表現されている。さらにドゥルーズは女性における表現の現前性を強調している。そしてこのことの帰結として、ドゥルーズは女性を否定することの不可能性を主張している。どういうことか。他者と違って、女性は自分とは切り離され得る外部世界を表現するのではなく、彼女自身が「自身を可能化する」ことで自身を表現する。つまり女性においては表現されるものと表現するものが一致している。表現されたものは表現と切断可能なものではなく、一切が端的に現前している。ゆえに女性の表現を「ふるまいに還元する」ことはできないのだ。女性の表現においては、可能的なものは否定し得ない仕方、表現と一致して現前しているということになる。

それでは、この女性が現前させる可能的な彼女自身とはどのようなものなのか。これは他者が表現する外部世界とはどのように違うのか。他者が表現する外部世界とは、疲労させるものが存在する世界に対して提示される、疲労させるものが存在しない世界であった。つまり、この世界の論理を全く否定する別の可能世界を提示することが、他者による表現の機能であり、ドゥルーズはこの他者が提示する可能世界を実現させることを「友情」と呼んでいる。われわれと他者との間には、否定を否定し返す敵対関係もあり得れば、否定を実現させる「友情」という関係もあり得るのである。それに対して、女性の表現はどうなのか。女性は

この疲労させる世界を、もはや疲労させるものなど存在しない別の世界に置き換えるといったことはしないのだ。女性は単にその本質において、他のことに興味を失わせる能力を持つものなのだ。なぜなら彼女自身が他のものとの関係を持たないものであり、彼女は外部性なき世界なのだから。

(7)

他者がわれわれの世界を外部世界によって置き換えようとするのに対して、女性はこの世界と敵対関係になったり友情を結んだりすることない彼女自身を表現する。そして、彼女自身がいかなる関係も他のものとの間に結ばないことによって、われわれは表現された彼女自身のみにはしか興味を向けることができなくなるのである。既に確認したように、女性における表現は表現されたも

のと表現の一致の状態にある。このことが意味するのは、表現する女性は表現された彼女自身であり、それゆえに表現された彼女自身以外のものの性質を帯びることはない、ということだ。他者は外部世界を表現するが、他者による表現それ自体はこの世界に属していた。それゆえ表現は外部世界とは別の、この世界における表現であり、この世界と表現された外部世界との間に様々な関係が生じ得ることになる。しかし、女性はこの世界と別の外部世界を表現するのではなく、表現それ自体は表現される彼女自身である。この場合、表現と表現されるものとの間は存在せず、ゆえにそこに関係は結ばれ得ない。女性はこの世界にも他の世界にも属さず、端的に自己自身を可能化して表現しているのだ。

可能化する、とはどういうことだろうか。ドゥルーズはあまり明確な定義を与えていないように思える。女性による表現は他者による「可能世界の表現」とは区別される表現であった。しかし、そのことは女性による表現が、この世界の表現であることを意味するわけではないだろう。既に見たように、女性が表現するのは自分自身であり、それは自己以外のいかなるものとの間も持たず、関係を結ばないものの表現であり、表現する女性は表現される彼女自身と一致しているのであった。そうであれば、表現している女性はもはやこの世界に属しているのではない。表現する女性は、それが表現する彼女自身という外部性なき世界と同様、一切のものとの関係性を放棄した状態で現前し、われわれはそれを前に、それ以外のいかなるものへの興味も失う。なぜなら、表現する彼女は、外部世界と関わらないのと同様に、この世界とも一切の関係を持たず、それ自身でしかなく、それ自身としか(それも一致という関係でしか)関わらないからだ。そうであれば、表現されたものと表現するものとの一致としての女性は、この世界を否定することなく、この世界から離脱しなければならないだろう。ドゥルーズは、否定性なしに関係を消去する方法として、可能化する、という表現を用いているのではないだろうか。

3. まとめ

ここまでドゥルーズによる「女性」概念の規定の試みを追ってきた。「女性」は他者論の文脈に位置付けられる概念である。ドゥルーズは従来の他者論において論じられる他者概念が性を帯びていないものである点を批判し、性愛という局面を考えたサルトルの他者論もまた性を愛するもの＝主体の側から考えている点

で不十分であると考えた。「愛されるものの現象学でなければならぬ」とドゥルーズは言っている。そして、ここで言及される愛されるものとしての他者、主体と関係せず自らを愛され得るものとして表現する存在を、ドゥルーズは「女性」という概念で論じている。しかし一方で、女性の概念は他者の概念との対立によって説明されている。おそらくここでは、サルトルの他者論もまたそうであるような、主体との関係で考えられた他者論の対象を、「他者」として規定し、それに対して「愛されるものの現象学」の対象であるような他者としての「女性」を対置しているのだろう。この「女性」とは「他者」のようにわれわれの世界を否定する外部の可能世界を表現することで、われわれとの敵対ないし友情の関係を結ぶような他者ではなく、この世界との外部世界との関係を持たずに、ただ自己を表現し、自己のみに関心を向けさせる存在なのである。そして、他者による外部世界の表現が、それが表現する外部世界とは切り離され得るのに対して、女性による表現は、それが表現する彼女自身と一致し、現前している。表現と一致していて、かつ外部世界ではないにも関わらずこの世界と関係を結ぶわけでもないもの、それが女性が表現している彼女自身、可能化された彼女自身なのである。

われわれは「女性の叙述」における、「女性」概念の哲学的規定というドゥルーズの試みを追ってきた。ドゥルーズは「化粧」や「愛撫」といった多岐にわたる議論を以上のような他者論の文脈で論じられた「女性」の概念に接続しているが、本稿では詳述しない。本稿が最後に言及しておきたいのは、『差異と反復』を主軸とした前期ドゥルーズ哲学において、「女性」概念と対置されていた「可能世界の表現」としての他者が、どちらかといえば重要な位置付けにあるという点である。つまり、前期ドゥルーズ哲学においては「他者」を否定して「女性」を称揚する哲学というよりは、むしろ「他者」の概念が前線を担っているかのように見える。それに対して、序で触れたように、ドゥルーズ哲学において「女性」的表象が登場するのは『ミル・プラトー』や『意味の論理学』といった『差異と反復』以降の著作においてであるようだ。だが、「女性の叙述」はわれわれに、むしろ他者論によって彩られる前期ドゥルーズ哲学よりもさらに初期の段階で、すでに「他者」とは異なる存在として「女性」概念が考えられていた、ということを教えてくれる。以上が、「女性の叙述」についての簡単なメモとなる。

Notes

1. もちろんドゥルーズの議論から哲学以外の分野における「女性」に関する諸々の議論へと接続することは可能であろうし、それは喜ばしいことであるが、本稿のテキスト解釈上の立場としては、あくまでドゥルーズが「哲学的」と銘打っている以上は「哲学」に独自の「女性」概念が構想されているのだろう、と想定し、他の議論への接続可能性について

は言及しない。また、「哲学」という領域のみから「女性」という概念を規定することなどそもそも可能なのか？「哲学」に独自の「女性」概念などあり得るのか？という疑問が生じ得るだろうが、本稿の立場としてはドゥルーズが一貫して「哲学」の問題として「女性」を(あるいは「哲学」の問題としての「女性」を)論じていることを鑑みて、あくまで「哲学」という領域に独自の「女性」概念の規定、というドゥルーズの試みを幾分かチャリタブルに評価し理解することを目指す。

2. 『書簡』 p. 323.
3. 『書簡』 p. 323.
4. 『書簡』 p. 324.
5. 『書簡』 pp. 324-325、もっとも、当該箇所ではドゥルーズは現前する他者との連帯の可能性に関しては、いくらか懐疑的な口ぶりである。ただし、後の議論を確認する限り、ドゥルーズは他者との間の敵対のみならず友情(可能世界を実現すること)という関係をも認める形で論を進めている。
6. 『書簡』 p. 325.
7. 『書簡』 p. 328.